

「日本人は、何処に？」

～ボストンの経験から～

関東財務局管財第二部長（前 ハーバード大学国際問題研究所客員研究員） 北條 純人

1. はじめに

ファイナンスをお読みの皆さん、こんにちは。筆者は、平成元年に大蔵省（当時）に入りました、北條純人と言います。公務員生活も約29年半となりましたが、これまで、財務本省・財務局勤務が合計13年、それ以外（大学の先生、他省庁などなど）が16年と自分ではバラエティ豊かな公務員人生を送っていると思っています。本省・地方局勤務以外の16年のうち、中国・上海勤務が3年ありますが、この度、アメリカ勤務も経験させて頂きましたので、それらの経験を踏まえて、記載したいと思います。

2. ボストン生活（仕事面）

まずは直近、2017年6月から、2018年6月まで、ハーバード大学国際問題研究所客員研究員という身分でアメリカ・ボストンに赴任しました。赴任といっても役所の書類上は長期出張扱いでしたが、実際1年、アメリカで生活しました。客員研究員といっても、オブレーションは、1年で論文作成のみ、でして、大学の授業の単位取得などは、必要ありませんでした。しかしながら、大学の授業期間中（秋学期、春学期）は、関連行事が多く、それなりに刺激的な大学生活を送ることができました。

だいたい1週間は、以下のような感じです。大学の授業は、単位取得などは必要ないものの、最低2コマの授業を聴講することを求められます。筆者は、上述のように中国での勤務経験もあるので（中国帰国後のポストが滋賀大学准教授だったので、そこでも、「中国経済」などを教えていました。）、ハーバード大学での研究テーマを「中国・人民元為替改革の今後の見通

し」としていました。従って、聴講授業も、中国関連のもので固めようと思ったのですが、国際問題研究所の教授からは、「聴講授業は、必ずしも自身の研究テーマに拘らなくてもよい。逆に視野を広げるために、例えばアメリカ経済など、他分野の授業をとってみても良いのでは。」とアドバイスされました。それもそうだな、と思い、中国経済以外の授業（マクロ経済や金融政策）も聴講しました。また、毎週火曜日には、国際問題研究所主催のセミナーが開催され、これは出席マストであり、かつ（セミナーは午後一から始まります。）、自身の研究テーマ等に関連がある場合は、セミナー開始前の講師との昼食会に呼ばれます。このセミナーの講師は、ジョセフ・ナイ氏（国際政治学者、いわゆる「アーミテージ・レポート」の作成者の1人）であったり、エズラ・ヴォーゲル氏（社会学者、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の著者）であったり、また清家篤氏（経済学者、第18代慶応義塾長）もいらっしゃいました。筆者は、エズラ・ヴォーゲル氏との昼食会に呼ばれました。という訳で、月曜日は、授業（マクロ経済）、火曜日は、セミナー、水曜日は授業（金融政策）、木曜日は、大学のレセプション（例えば、アジア研究関係者の集い）という感じでした。なお、金曜日は、アメリカ人にとっては、既に週末モードということらしく、大学でも、金曜日の午後は、基本的に授業のコマがない程でした。筆者は、これらの授業、行事の合間に図書館等で、自身の論文執筆等に励んでおりました。しかしながら、上記の行事等は、あくまで、授業学期中のことで、授業がない時期は、行事の数もぐっと減ります。あるハーバード2年目の同僚は、「ハーバードタイムは、9月、10月、11月、2月、4月（3月には、春休みも!）の5か月のみだ!」と言っていました。ただ、

授業そのものは、さすがハーバード大学といった感じで、興味深く知的好奇心をそそられるものが多かったように思います。例えば、マクロ経済の授業では、「警察の調査と犯罪抑止」や「健康維持のためのインセンティブをどう高めるか」など、これって経済なの、という感じの授業もありましたし、金融政策の授業では、イギリスやドイツの元中央銀行幹部や銀行幹部の方を呼んでの講義などもありました。余談ですが、こうしたヨーロッパからの先生は、欧州でのマイナス金利政策は、うまくいっていると自画自賛していましたが…。御存知の方も多いと思いますが、アメリカの大学は、その資金について、寄付がかなりのパーセンテージを占める寄付文化が根付いています。特にハーバードは寄付金額が多く、その資金力は潤沢です。外部の有名講師を多数呼べるのも、その資金力あってこそでしょう。

また、ハーバード大学では、日本語を学んでいる学生（スイス出身、コロンビア出身など、様々なひとたち）がおりますが、彼らを相手に、日本について講義をする機会を得て、実施しました。テーマは迷いましたが、筆者は、財務省からの派遣なので、「日本の財政」ということで講義をしました。彼らは、日本語能力もさることながら、日本の政治、経済、社会、文化などよく勉強しています。彼らと交流する機会もあったので、研究テーマを聞いてみると、「明治維新後の日本の警察制度の確立」、「日台・日中関係の比較」など、日本人でも知らないようなマニアックな研究をしている人もいて、日本語の文献もかなり読み込んでいました。逆に、日本になぜ興味を持ったか、を聞いてみると、「ドラえもん」などのアニメを挙げる人が多く、その後の彼らの研究テーマとのギャップを感じつつも、こうした日本のアニメなどのコンテンツの世界への発信の重要性を再認識したものです。

さて、上記の「日本の財政」の講義の話に戻ると、彼らは熱心に聞いてくれ、たくさん質問も頂きました。「東京オリンピック後の経済が心配」「若者の活躍の場は?」「どうして財政赤字が拡大したのか」などです。財政赤字については、「日本は（道路、河川などの）インフラ整備が充実し過ぎ。」（暗に、そこまでお金をかけているから、財政赤字が拡大したのでは、と言いたい。）などの指摘を頂きました。アメリカは、

（これまでは）移民も含め、若者人口もそれなりに増えているので、日本ほど少子高齢化を心配しなくてもよいのかも知れませんが、いずれにせよ、日本のことをよく勉強し、質問も鋭いものも多く、ハーバードの学生との交流は、筆者のとってもとてもよい勉強になりました。

以上が、オフィシャルな面での生活でした。

3. ボストン生活（プライベート面）

さて、ハーバード大学がありますのは、アメリカ・マサチューセッツ州ボストンの街です。ボストンは、マサチューセッツ州最大の都市であり、州都ですが、中心部は意外とコンパクトにまとまっており、かつ公共交通機関が発達しているので、ガイドブック等には、「アメリカは車社会であるが、ボストンは、車がなくても生きていける。」などと書かれています。人口は、狭義のボストンエリアでは、60万人台、近郊の市街地を入れた大ボストンでは、400万人台となります。筆者は、財務局出身なので、財務局存在都市との比較で言えば、中規模クラスの財務局である東北・中国財務局所在地の仙台・広島クラスの都市かな、というのが生活した実感です。

最近では、ボストンは、アマゾン（有名なあのamazonです）の重要拠点都市となることが決まり、地元では、それなりに盛り上がっていますが、産業都市というより、ハーバード、MIT（マサチューセッツ工科大学）、各医療関係大学などがあり、学問、芸術等が盛んな古都というイメージもあるかと思います。政治では、伝統的に民主党が強く、筆者も、トランプ現大統領を褒めるアメリカ人（ボストン人）とは、ついに、会えることは出来ませんでした。なお、現地では、アメリカのテレビ番組しか視聴出来ませんでした。夜トーク番組やバラエティ番組では、毎晩「今日のトランプ大統領のツイッターでの発言など」が取り上げられ、かつ、その発言自体がギャグとしてのネタになっていました。確かに「自由」の国ですが、毎晩、国の指導者がギャグのネタになるのもどうですかね…。

街中を歩いてみると緑が多く、そこは国全体の土地の広さを感じたりもします。筆者は、地下鉄も走って



ボストン市内の観光地・エーコンストリートにて。ボストンには、このような路地裏がおしゃれなスポットがあります。古都の趣があります。

いるメインストリート沿いに住んでいましたが、なんとそのメインストリートによくダチョウらしき動物の集団が歩いているのにも遭遇しました。ニューヨークほどの都会でもなく、ほどほどの田舎という雰囲気が結構気に入っていました。アメリカではマクドナルドがおなじみだと思いますが、ボストンでは、ダンキンドーナツのお店がやたらと多くあります。それもそのはず、ここボストンが発祥の地、ということですが、地元では、「貧乏人はマックへどうぞ、気品あるボストニアン（ボストン人）はダンキンドーナツだぜ！」と思われているそうです。筆者の実感では、「うーん。売っているものや値段もそれほど変わらないし、どちらもどっちかな。」というのですが、それでも当地滞在中は、ダンキンドーナツを愛用しました。ちなみに、あとは、「ベランダで洗濯物を干すのも、貧乏人のやること…」という都市伝説も流布していました。有名大学を抱えてインテリが多く住む街なので、ちょっと気取ったところがあるのかも知れません。

筆者は、当時2歳のこどもと一緒にボストンにいたのですが、実感として、こどもに優しい街であるとも思いました。これは、事前に、ボストンに住んでいた人からも聞かされていましたが、車社会の割には、極めてベビーカーに優しいです。信号のないところでも、ベビーカーで道路を渡ろうと待っていると必ず車は止まってくれます。また、スーパーやドラッグストアの前にくると多くの人が扉を（ベビーカーのために）開けてくれます。勿論、エレベーターなどの乗車時にも配慮してくれます。筆者は、上記のように中国にも住んだことがあるので、「日本人のマナーはよい。」

ということは世界に誇れることであると最近までは思っていました（最近は、だいぶ悪くなった（特に駅などで）、と感じますが。）。しかしながら、日本での例えば、「保育園はうるさいので迷惑施設！」などの保育園・幼稚園建設反対のニュースをみるたびに悲しくなります。もう少し日本もこどもに優しい社会であればよいのに、とアメリカで実感しました。こどもに関して言えば、アメリカの方が感情をストレートに言います。街をベビーカーを押して歩いていると、すれ違った人のみならず、反対の車線で車を運転していた人までが、わざわざ車を止めて、こどもに対し、「Oh! ソーキュート！」などの過剰とも思える表現・ジェスチャーで、こどもへの関心を伝えてくれます。日本だったら、こころの中で、「ああ、かわいいこどもだな」と思っても、知らない人の前では、黙っている人が多いでしょう。素直な感情表現は、やはりアメリカ人に似合います。

困ったことと言えば、まずは「チップ」が挙げられます。スーパーなどでの買い物にはないですが、レストランのみならず、ちょっとした対面販売のお店でも消費税のほかに、チップ（最低でも15%）を払わなければいけません。どう考えても、それほどのサービスを受けた訳でもないのに…と思うのですが、これがかの地の習慣なのでからどうしようもありません。ボストンは物価は安い、とガイドブック等を書いてありましたが、後述する不動産を含め、日本より物価は高い、というのが実感です。チップを除く元々の値段も、レストラン或いはスーパーで買う日用品等についても、日本よりちょっと高いのではないかと、というのが実感でした。チップに関して更に言えば、ある日本の焼肉チェーンのお店がボストンにも進出していましたが、時々出かけましたが、ある時、ウェイトレスに食事中、油をかけられてしまいました。日本だったら、店長が飛んできて、「クリーニング代はお支払いしましょう。」というところですが、当該者は、お会計時に何事もなかったようにチップを要求しました…。不動産も概して高い、というのが実感です。上述のように筆者の渡米は、長期出張扱いだったので、出張手当は受領していましたが、そのかなりの部分が家賃に消えました。日本のネットを見ていたら、ある（売れっ子）芸能人夫婦のタワーマンションの家賃がウン

十万円、という記事がありました。が、筆者のボストンでの住まいの家賃は、まさに同額のウン十万円でした。

この家賃で、日本ではタワーマンション（東京の湾岸エリアです！）に住めるのか、と感慨を持ちましたが、筆者の住まいは、外観はともかく、内部はトラブル続きでした。台所の水漏れ及びそれに伴い床が波打つように盛り上がる、電灯の故障、クローゼットの引き出しが開かない、トイレの水流しレバーの故障などです。これらについては、修理の人を呼ぶのですが、なかなか来てくれません。やっとアポイントメントがとれても今度は約束を守らないのです。日本の場合は、約束が守れない時は、事前に連絡があるものですが、それすらありません。こちらから連絡すると、「遠いからいけない。ちょっと病院に行く用事ができた。」などと信じられない言い訳が続きます。一応、「ソーリ、ソーリ」と謝ってはくれるのですが。アメリカ在住が長い日本人に聞くと、全ての人が「家の修理系の人間は、約束を守らない。仕事は自分の好みでやっているようだ。」と回答します。中には、「自分で修理することを学んだ。ちょっとした修理なら人に頼まなくとも自分で出来るようになった。」と言う人もいました。「郷に入っては郷に従え。」ということなのでしょう。しかしながら、郷に従い過ぎるとストレスがたまるものです。

以上、生活面でのあれやこれやを雑多に記してきましたが、どんな国に行っても、日本より良いところ、や逆に日本の方が優れている、といった点があるものです。筆者は、どちらかと言うと、海外勤務の経験を持つことを推奨する立場ですが、どこに行っても、メリットとデメリットはあるものです。大切なのは、デメリットを感じた時に、ネガティブに「ああ、日本に帰りたい。」と思うのではなく、貴重な経験を楽しむ、くらいの心がけが必要なのでしょう。筆者もえらそうなことは言えず、上記デメリットを感じた際に、ストレスで爆発しそうになったことも度々でした。でもよく考えると、日本に住んでいても窮屈に感じる時は、あるものです。物は考えようです。海外暮らしならではの楽しみをたくさん見つけてストレスの低減化を図れば、そのうち、「住めば都」と思えるようになります。

4. 日本人は何処に？

さて、30年程前に同じハーバード生活を経験した方に話を伺うと、日本人の同僚・学生がかなりいて、周りに中国人は1〜2名程度であった、と述べられました。筆者はというと…。例えば、「ハーバード日本人会」などの催し物を開催すると、普段何処にいるのだろーと思っていた日本人が、けっこう集まり賑やかな行事になります。しかしながら、普段大学のキャンパス等では、なかなか日本人をみかけることがありません。そのかわり目立っているのが中国人です。講義に出席しても活発に質問するのは中国人、セミナーに出席しても同様です。しかも、彼らの語学力は素晴らしいものがあります。まあ、厳しい選抜を経て、アメリカに来ているのでしょうから当然と言えば当然なのですが。また、キャンパス内でも大人数で歩いている中国人をよく見かけます。昔に比べ日本からの留学等が減ったとも思えないのですが、中国人のプレゼンスの高さ、日本人の存在感のなさ、というのはよく感じました。

最近、アメリカ司法省が、「ハーバード大学の学生選抜において、アジア系を不当に差別している」、という指摘をした、というニュースがありました。大学側は、これは「多様性の確保のため」であるとしていますが、実際、白人、アジア系、中南米系、アフリカ系の順に大学への入りにくさ、というのはあるようです（つまり、白人が一番ハンデが高く、アフリカ系が（点数が低くても）入り易い。）。多様性の確保というポリシーはわからないでもありませんが、こうした逆差別にも拘わらず、中国人が多い、というのはどういふことでしょうか。あるいは、中国人が多くなってしまったので、こうした措置が取られているのかも知れません。

これはキャンパス内だけではなく、街中でも同様です。私事で恐縮ですが、筆者が2003年にヨーロッパ旅行をした際、パリの有名ブランドの店に日本人が道路の方までずっと並んでいる様子をみかけたものです。それから15年…。ボストンやニューヨークにも勿論ブランドショップがありますが、（アメリカからみた外国人で）見かけるのは中国人だけです。しかも大人数でかつ若い人が多いという特徴があります。高

級ブランドの店に並ぶことがステイタスの高さで、かつそれがよいことだと必ずしも言えるものではありませんが、2003年のパリで見た景色を考えると隔世の感を禁じ得ません。ちなみに、ボストンには、トレーダージョーズという割と安売りのスーパーがあちらこちらにあります。そのお店だけは、よく日本人が買い物をしている姿を見かけました。最近の日本も可処分所得の伸び悩みに伴い、スーパーの安売りが人気だとの新聞記事をみるがありますが、既に海外でもその流れが定着しているのでしょうか。一般論で言えば、海外駐在者には、海外赴任手当等が出ているので、可処分所得はそれなりに高いような気がするのですが。いずれにせよ、高級ブランドショップと安売りスーパーの様子を見ると考えさせられます。GDPについて、日本が中国に抜かれてからもうかなり経つ気がします。それでも1人当たりによれば、まだまだ差があると思います。バブルの頃のように、海外の不動産等を買って漁るのはどうかと思いますが、ブランドショップ街に日本人を殆どみかけないのは、ちょっと寂しい気がします。

更にショックだったのは、時計屋さんをみた時です。ブランドショップも入るモールにその時計屋はあるのですが、ありがちですが、代表的な世界の現地時間を大きな時計で表示し、店の看板にしています。時計は3つあり、アメリカ東海岸現地時間、ロンドンの現地時間、そして北京の現地時間を表示していました。ちょっと前ならば、アジアの代表時間は、東京時間であっただろうに、今では、北京のものとなりました。これは1つの事象にしか過ぎないかも知れませんが、アメリカからも、既にアジアの代表は中国である、と認識されているとしたら、残念なことです。

5. アメリカと中国

最近の大きな海外経済トピックと言えば、米中貿易戦争でしょうか。ハーバード大学の教授連中に言わせると、トランプ大統領が、「貿易赤字イコール悪である。」という考えに固執し、「経済学的にはナンセンス」、ということなのでしょう。ここでは経済学なことではなく、米中国人の気質を考えてみます。上述のように筆者は、アメリカと中国の両方の駐在を経験し



ワシントン・ホワイトハウス前にて。ワシントンは、ボストンからだと、電車で8時間程度かかります。当日は、トランプ支持のTシャツを着た集団がたむろしてました。

ました。そこで、誤解を恐れずに言えば、アメリカ人と中国人の気質は似ている、と言えると思います。

共通しているのは、物事をはっきり言うところと、降参しました、参りました、と言うことが嫌いなところ、そして更に、強く出ているようでいて、実は落とし所もしっかり考えているところでしょうか。そこには、日本人のように、「阿吽の呼吸」「言わなくてもわかってくれる（最近のはやり言葉では付度、というのでしょうか）」といった文化は存在しません。もつとも、米中貿易戦争に関して言えば、本当に「落とし所」を考えて行動・発言しているのか疑問なしとはしません。しかしながら、感情的な面も含め、米中がこじれてしまうのは、実は、お互いの気質が似ていることが、ある程度の影響を与えていると思います。また、さらに付け加えると、アバウトなところ（いい意味でいい加減なところ）も似ていると思います。日本に帰国すると、例えば毎日のゴミ出しなどで、「日本は厳格すぎるなあ。」と感じます。環境にはやさしくないのかも知れませんが、アメリカと中国での生活は、彼らの「いい加減さ」を感じるが多々あります。米中貿易戦争の今後、ということ言えば、この「いい加減さ」が良いほうに作用してくれることを祈るばかりです。

6. おわりに

最近の若者は「内向き志向」だという論調を目にすることもあります。何も、海外勤務等を希望しないことが、イコール内向きであると断ずるつもりもありますが、やはり一生に一回は、海外暮らしを経験するのも悪くないと思います（ちなみに、当たり前ですが、旅行と海外暮らしは全然違います）。上述のとおり、海外暮らしもいろいろな不満やストレスを抱えることも事実です。筆者も、改めて、日本や日本人のよいところ、を再確認した次第です。しかし、繰り返しますが、デメリットもあればメリットもあるものです。特に広大な国に行った場合は、その広大さを実感することも多々ありますし、その国ならではの人情味、文化、料理など日本とは一味違う良さも味わえると思います。アメリカでは、特に長く暮らしている女性から、「日本に帰りたくない。当地の方がいきいき出来る。」という声を多数聞きました。これは、推察するに、アメリカの実力主義が彼女たちに合っているからだと思いました。ある程度、腕に自信のある人は、アメリカの方が合っているのかも知れませんが、でも、日本人である筆者は、（こうした海外で活躍する人たちにも）日本人の繊細さ等も無くして欲しくはないと思います。このように、客観的に日本と他国を比較できるメリットもあります。迷っているのであれば、是非、海外勤務等をお勧めしたいです。

さて、上述した、日本人のプレゼンス低下、中国人のプレゼンス向上ですが、GDPなどの経済力については如何ともし難い面があるのかも知れませんが、やはり日本人はアメリカでも（ハーバードでも）目立って欲しい気がします。ブランドショップに並ぶことだけが、プレゼンスではありませんが、ハーバードの学内を得意げに闊歩している中国人を見ると、日本人もっと目立ってしかるべき、それだけの能力（語学力だけではなく）はある、と信じます。ボストン生活において、いろいろな日本人に出会いましたが、一人一人の能力は優れていると思います。ただ、もっと目立つにはどうすればよいか、という答えが見つからないまま、1年の滞在期間が過ぎてしまいました。筆者の学内での研究成果のプレゼンには、多くのアメリカ人等が来てくれました。是非、我こそは、という方の

チャレンジも期待したいところです。

さて、ボストン生活の細々としたところまで書いて、雑駁な文章になってしまいましたが、筆者の言いたいことは書いたつもりです。いろいろな国を比較して、「やはり、日本が一番だ。」と感じるもよし、「俺の（私の）活躍の舞台は、ここ（海外）だ。」と思うもよし。皆さんも一度、海外暮らしを体験してみませんか。

（了）